



新涼夜話

寶曆九年

涼傳

中村俊定文庫
文庫 18
357



清浦村夜話



新漁夜話



越の朝寝なる一嵐のゆゑ。風聲は
 紅の夢を道行く。予が某庵に於
 う。ふも日あはれ。眼も及ぬ四方乃
 春のうらさ。耳に傳ふる山ほとあはれ。心に
 一輪を懐く。つら。尚附合ハ。志をなす
 と。夢の詞は外をそと。うた。う人上り
 白を化す。月も。さす。帰る。海

清浦村夜話

信馬原

山并

飛込

〜

多打

新馬

別

月形

物打

長人

〜

少打

そればかりは其作のあはれなるさふ。まゝとた
一海をほらるとりあはれと。あや
又。月原のまぢ。うめく。本日。果
は。と。と。ま。人。射。一。砂。く。吸。路。庵。子。控
西。さ。か。の。ま。も。り。ひ。世。中。子。糸。昔
神。馬。波。子。中。ま。ま。ま。仇。此。子。歳。の。行
を。論。ず。梅。路。り。と。り。た。の
新。馬。原。上。と。は。橋。の。所。に。成

信馬原人よ。多打。入
は。白。林。妙。の。作。も。あ。り。祿。ど。唾。人。上。の
は。と。た。た。だ。だ。人。所。は。あ。ま。ら。ら。バ。
た。と。新。奇。の。化。を。あ。ま。も。風。俗。の
う。ま。ま。あ。ま。ま。と。あ。く。人。上。ハ。ま。あ。た。ち
ま。ハ。天。地。を。あ。ま。ん。ハ。人。上。も。あ。下。ノ。人。上
あ。ま。ん。ハ。あ。ま。あ。ま。あ。ま。あ。ま。あ。ま。あ。ま
あ。ま。あ。ま。あ。ま。あ。ま。あ。ま。あ。ま。あ。ま

幻
 田
 本
 了



出
 流
 自
 内

心なき星乃多さよ天の川	涼
月をみよ移り山乃代	一
管燕も女郎新袷きけ	代
以美の魚を丸うし	代
善徳坊へ肩う高申持来	代
作向う急使船の旅	代
りもりも移を仕直時分	代
冬のお撲ハ二人は	代

即ち其の物亦うゝ板瓦と書るに
 かきく産物の評ある白も乃即ち一
 虫の信家とありてなお亦う九八
 にありめく一白まをまきくに彼
 二江戸の海馬人情の怪と新奇
 をこのうらみりゝ左式抄んゝ
 一冊

氣附句

洗濯は狭る力を待てる
 女房作ら母に敵意

短冊も葉一並しとて
 体への多しは片の親ら

留まると浮きくき一寒
 挿伏の後ハ風呂さへあし解る

重なり奏の各尾に敬く
 天恵乃とるちのさうが

神風

編

二六

河

降

江

之

み

仲

江

江

江

をうへハ船乗の楫は見えたり

三月の二日ハ餅は更へて
留まり子威しは後寸櫂は

古尻は筆の目利しは昔か
犬を連ねてを遊ばせたり

綴 繪は空なる金
舞のを仁事と傳へ流る

掃 飯へ西瓜の糸番は
唇毛のくくみは本振

本 ありきう。換は暗くは
灸ハ後く教を忘せる

七 夕一羊を飼へては
浦の尻ハ信者留のうら

離 ぶ快を言事子御へ止し
杉も鉄のあまハ有る

附 けるるたう梅はるのあま
初言も言望形は買へる

所 つきこくも欠を重沈
松も鹿のうらハ足り

鶴口、何れむ申、念入
小坂、襟乃、さる、緋、笠

農、業を、全、く、つ、つ、限、る、も
鳥、帽、子、又、平、く、つ、つ、雨、笠

屯、致、言、事、を、か、に、立、る、也
茶、を、ゆ、う、ま、さ、や、ふ、生、疎

目、玉、に、茶、売、の、を、活、ら、む、ゆ、い、ん
目、見、へ、の、欠、と、き、隠、る、る

百、生、を、む、さ、ら、つ、風、の、枝、折、り
百、生、は、い、ま、あ、ま、つ、折、り、を

大、小、を、喰、ら、に、さ、ハ、流、石、こ
奴、を、い、つ、つ、古、着、屋、へ、寄

糸、湯、を、さ、ら、れ、ぬ、事、に、紅、花、知
道、を、問、ふ、は、年、前、の、う、い

長、屋、へ、ハ、江、戸、も、小、さ、い、は、う、い
雙、の、誓、古、子、天、恵、者、也、を

土、ま、う、つ、日、御、へ、さ、る、ま、の、ま
松、を、お、ろ、す、ハ、下、リ、や、う、な、い

花、被、の、衣、を、つ、附、ぬ、礼、金、を
被、ぬ、ま、つ、傘、を、つ、つ、い、い

一石文り連歌一林ノ
終母もだまらう折れ、まの終り

夜更の蟹斗を大に食ふ
早合意の口上は確小

蟹喰も天恵ありの春の来
外科の談で世論乃女

風呂吹子、さへちんもと撰
角力九ハ表、さる合ひは、世とてうり

結所又終ハさかあし麻のあ
舟のり、彼志の裏門、来

湖の目も、新魚も、船上り
舟のり、さる合ひは、世とてうり

秋乃日ハ、童話の夢も、家も、香も
さる合ひは、世とてうり

実乃、成り、終、乃、さる、ハ、童話
交の道者、う、初、終、九、来

こ、交、め、ハ、還、俗、も、世、ぬ、承、盤、之
さる合ひは、世とてうり

草、物、も、食、り、も、終、り、終、り、者
終、り、も、さる、合、ひ、は、世、と、て、う、り

道弘子の皇を下はえつて
襖く作つとあまの仙

公の嫁はまゝ一るやうに
柳を交へてみゆのりさう

お智をまゝくは京の御臺は
粽へ減らして松の葉は

七夕へ伊達を貸のち高の月
踊り強う一ツ家をも

お松は天つを味方の
うらみ切らして咽のふえ

本地の骨うら秋も飯を拂
片庭指くもろくせ尻

大小をさ急のやうに指く
京乃負金ハあは溜かぬ

大和路ハ六段の是も念ふ
火縄をせめても松竹

所免子ハ仕所ゆまの是らん
扇の路くはくも遠し

菘入も病をうけく雨の中
菘紐く煮をうきうきて

夫よのこ 菊 香く 虎押一
役よ 立れのり 於 書

一 夫の 持ひ 仲 乃 一 月 一 口
菊の 足 也 又 物 足 一 口

弱 状 の 中 一 八 月 の 幸 七 あり
あ 少 ぬ ん 格 の 乞 合 進 出 也

板 の 本 一 一 京 の 幸 一 秋 の 月
摺 込 一 一 白 の 飛 石

片 一 一 桶 の 桶 の 桶 の 幸 一
片 一 一 桶 の 桶 の 桶 の 幸 一

一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
二 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一

信 病 の 念 仏 徳 の 一 一 一 一
皆 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一

小 使 の 幸 一 一 一 一 一 一 一
格 神 と 幸 一 一 一 一 一 一 一

本 人 の 幸 一 一 一 一 一 一 一
幸 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一

ひ 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
細 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一

燈火の消く廣る月の中
右のをく成く信病

山も丹波ハ雪乃子
坊子成夏の日帰リ

ゆきうたくと火種はうけ初時
誕生日を元紙く立ッ

ふ十ほどちちの屋根へ生る有
指換ちうくねむ本也リ

宵月と松の上も定らぬ
喜心紙ト戸の紙子入

景波をの透り配さところ
中く高き上級屋の隠家

時舟を近く曇る雪原
糸の糸を冷くゆきのと足達へる

金髪へ髪く元る乙子
菘への土産は脊中又せく者

廻板はちう好一槌の門の
響は遠くく口の廣る

消炭乃十能へ息うけく
推替入く切と仕せり

大正の冬、備へては、
雪をたう結く尚摩るなり

雪の降る爪と成時とある
櫛の又せふんすよ備 白

降る降るぬやよ三月の月
白く流る牛の洗足

花傍へ小僧の返詞も軽く
空む瓢乃形は即ちの

うけ香を祓七戸一る世石之
呵く病を親へ居 あり

音像を跨る如終ハ脛く
夏の雨ハ尾を乃うをん

着縁の自悟を月と変く並
侍と糸をさううと也

振附と袖の留物 乃と並
寺の子供を帰と利 刀

さ由附々よさる喜の啼き
此子成時よ也を也後 帯

扇をハ糸乃黒さの路ら
解き中よ競るんる若



驚の按字は深世記
進利は借くきくハ橋糸

白洲ハ梅の移る麻一ハ
仕也火雄を猫の足送

余仏も志一立ても能日
縷子ハ却て縷を拭

右仏ハ飯名つけやう
ハ流の肩ハ押合

松をえる思粟も出
後ハくく名ハ惚

水口
水口

山
山
山

山
山
山

書林

江戸通油所

須原太兵衛

清
清
村

